

## ソフトウェア品質技術者資格 派遣責任者インタビュー 九州日本電気ソフトウェア株式会社様

### 「ソフトウェア開発の生産革新活動推進を実現する一手段として、 JCSQE 資格を活用しています！」

2009年に創設された「ソフトウェア品質技術者資格」制度。今年で5年目を迎えていますが、受験者数も順調に増加し、昨年は1000人目の合格者を輩出したほどです。

これは、各企業の人材育成のスキームに本資格が組み込まれ、人材育成やソフトウェア品質向上に資格を活用する組織が増えてきていることが一つの要因です。

今回は、継続的に受験者を派遣いただいている九州日本電気ソフトウェア株式会社を訪問し、技術戦略本部の八尋本部長と高谷マネージャーにお話を伺ってきました。

同社は、ソフトウェア品質向上の活動(NECグループでは、「現場革新運動」と呼ぶ)において、NECグループでもトップランナー的存在として名を轟かせていることもあり、「ソフトウェア品質技術者資格の活用」にとどまらず、同社の様々な品質向上への取り組みを伺って参りましたので、ここにご紹介いたします。

(聞き手: 日本科学技術連盟 安随 正巳)

## 九州日本電気ソフトウェア株式会社

技術戦略本部長

技術戦略本部 PMOグループ マネージャー

八尋 美徳様

高谷 幸一様

### NEC グループの九州拠点で高品質のソフトウェア 製品を生産！

聞き手: まずは、貴社の事業内容と歴史について教えてください。

八尋: 弊社は1981年に設立され、一昨年創立30周年を迎えました。九州地区を拠点として、官公庁や民間企業のお客様に向けた、システム構築や保守・運用、アウトソーシングなどのITサービスやアプリケーションソフト、ミドルウェア、組込みソフトなどの各種ソフトウェアの開発を行なっています。事業所は、福岡以外に長崎、大分、宮崎にあり、約860名の従業員が在席しています。

聞き手: そのうちソフトウェア開発に携わる技術者の方は何名くらいおられますか？

八尋: 約700名います。



《本社のある NEC 九州システムセンター》

聞き手:ところで、八尋様は、技術戦略本部の本部長をお務めですが、同本部のご担当範囲を教えてください。

八尋:私が統括をしている技術戦略本部は、1)生産革新推進グループ(小集団を中心として改善) 2)PMO グループ(トップダウン) 3)IT アーキテクトグループ(技術) の3つの機能に分かれ、それぞれソフトウェア品質向上に向けた活動を展開しています。

聞き手:なるほど。品質向上や技術向上のための全社の旗振り役といった位置づけなのですね。技術戦略本部には、何名のスタッフが在席しているのですか？

八尋:70名ほどです。

聞き手:ソフトウェア開発者が約700名と伺いましたが、70名とはかなり充実していますね。

八尋:はい。他社のことはよくわかりませんが(笑)、確かに手厚いかもしれませんね。しかし、純粋なスタッフメンバは20名程度ですし、社内には常時300ものプロジェクトが動いています。そのプロジェクトを成功に収めるため、また技術者の人材育成の観点から私はこのくらいの数は必要だと考えています。

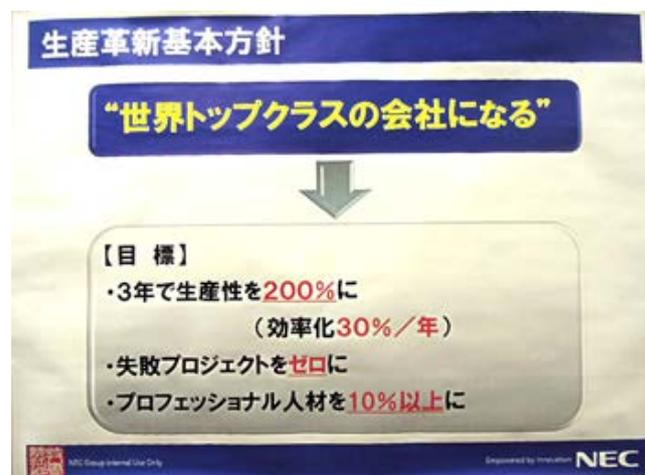
※品質会計とは？NEC独自のソフトウェア品質管理手法、NECグループで広く運用されている。現場・現実・現物を重視している点は大きな特徴  
⇒ ソフトウェア品質製造工程までに作り込んだバグを“負債”とし、レビューやテストにより、負債を返済(摘出)して、負債(残バグ)が0になった時点で出荷するという管理手法。



《お話を伺った 技術戦略本部 八尋本部長》



《お話を伺った PMO グループ 高谷マネージャー》



《NECの生産革新基本方針》

## 様々なソフトウェア品質向上活動を展開

聞き手: 貴社は、NEC グループの中でもソフトウェア品質向上に向けた先進的な取り組みを継続して実施されていることで知られていますが、そのペースとなるものはなんですか？

八尋: やはり、ベースは「品質会計」※を中心にした取り組みですね。4 年前から導入しています。

聞き手: 「品質会計」とは、NEC における品質確保をするための考え方で、全体品質を担保するための基本的な考え方ですね。

八尋: はい。その通りです。ただ、お客様に「NEC では品質会計をやっています！」と言っても、なかなかその意味をすぐには理解いただくことはできません。品質に対する知識や活動がベースにあり、地に足をつけた活動をしようとしています。

聞き手: NEC 本体から品質向上に対する指導もあるのでしょうか？

八尋: あります。しかし、基本的には自律的な活動を展開しています。そうでなければ、効果は出ないと思います。

## ソフトウェア品質技術者資格(JCSQE)の活用

聞き手: そんな中、当財団主催の「ソフトウェア品質技術者資格制度」をご活用いただいています。今まで、約 20 名の方が受験をいただきました。

八尋: はい。社内で受験を推奨し、活用させてもらっています。

聞き手: どのような考えのもと JCSQE 資格を活用されているのでしょうか？

八尋: 社内で受験者が増えるきっかけとなったのは、NEC 全体で展開している「NEC・サーティファイド・プロフェッショナル」(NCP)という資格制度です。

聞き手: NCP について、少し詳しく教えていただいてもよろしいでしょうか？

八尋: わかりました。グループ企業を含めて大々的に展開しています。NCP には、「ソフトウェアアーキテクト」や「プロジェクトマネージャー」など、弊社のビジネスを遂行するために必要な専門家を定義していますが、品質関連では、「ソフトウェアプロセス&品質」と呼ぶ専門家が定義されており、この技術領域では、JCSQE を資格要件の一つとして利用しているのです。

聞き手: ソフトウェア品質に関する社内での資格制度があるということですね。これは、品質に関連する部門の方には励みになりますね。

八尋:NCP は、上席、プロフェッショナル、スペシャリスト、アソシエイトの 4 段階で構成されており、上席が最上位クラスとなります。NCP では、技術領域によって各々必要なスキル要件、必須研修の受講、資格要件、業務遂行状況、および実績などが定義されています。

**聞き手:ものすごく充実した制度ですね！**

八尋:その中で、JCSQE はソフトウェア品質技術に関する知識を有しているか否かを判断するのに最適とされています。「ソフトウェアプロセス&品質」のプロフェッショナルでは、JCSQE 中級を A ランクの資格、JCSQE 初級を B ランクの資格として設定しています。すなわち、JCSQE 中級を持っていれば、「ソフトウェアプロセス&品質」のプロフェッショナルの公的資格要件を満足していることとなります。

**聞き手:私ども財団にとっても大変有り難いお話です！**

高谷:弊社には、PMO が 15 名ほど在席しています。私は PMO グループに所属していますが、このメンバーが JCSQE 資格を取得するのは当然のことです。私も資格を保持していますよ。

**聞き手:高谷マネージャーもお取りいただいているのですね。ありがとうございます！**

高谷:やはり、改善や品質を仕事として行っているメンバーは、力量を社内外にアピールする必要がありますから。スキルアップを目的に資格取得を計画し、チャレンジさせています。

**聞き手:ライン側の方々のチャレンジ状況はいかがでしょう？**

八尋:実は、開発側で JCSQE 資格を自主的にとる人が増えてきたんです。

**聞き手:これは、どういう目的で受験されているのでしょうか？**

八尋:品質に対する意識が高まってきており、PJを遂行するうえでの基本スキルとして品質管理を体系的に理解したい。そして、改善活動に活かしていきたい！という想いだと思います。

**聞き手:JCSQE 資格の実際の評価はどうでしょう？**

八尋:はい。良好ですね。でも、受験者が増えることももちろんよいのですが、これをきっかけに SQuBOK などを体系的に学んだり、テスト技法を深めたりして欲しいと思っています。

## JCSQE 初級試験 記念すべき 1000 人目の合格者も同社から

聞き手: JCSQE 初級試験の 1000 人目の合格者が貴社の浅田さんでした！

八尋: そうなのですね！彼は、流通グループのラインの第一線でプロジェクトのリーダーを務めています。品質の意識が高い前向きな人間です。

聞き手: そうですか。当財団としては、記念すべき 1000 人目の合格者ということで、SQiP シンポジウムのご招待状やソフトウェア品質関連の書籍の贈呈も検討しています。

八尋: ありがとうございます。本人も喜ぶと思います。

### 高品質なソフトウェア開発のための 様々な活動

八尋: 2005 年に、NEC グループのソフトウェア開発の関連会社で生産革新活動に取り組むこととなりました。「目指すなら世界トップを」という目標で、具体的には年 30% の効率化を目指すことになったのです。

聞き手: 年 30% の効率化ですね！当然、今までも改善活動をやられてきた中での数字ですから、かなりチャレンジングでしたね！

八尋: はい。そうです。実現のためにまず整理したのは、以下の 3 本柱です。(画像参照)

(1) 現場改善の流れを作ること。(2) 仕事を標準化して定常的な流れをつくること。(3) 革新的なことにチャレンジすること

その中でも現場力の向上を狙って、現場改善の流れを作る事を重視して活動を進めてきました。

聞き手: 「現場改善」とは、製造業では QC サークル等に代表されるように活発な活動が展開されているように思いますが、ソフトウェア開発の現場では正直なところあまり頻繁に活動事例を聴く機会は少ないという印象を持っています。

八尋: はい。そうかもしれません。しかし、弊社ではまさに「ボトムアップ型改善」を実現し、それにより本来目的とする生産革新を達成したいと考えました。例外なく全員参加の活動としたことで着実にレベルアップにつながった、と感じています。



《NEC の生産革新の 3 本柱》



《現場改善レベルピラミッド》 掲示版を紹介いただいた  
生産革新推進グループの大守順子さん》

## **NECの生産革新の3本柱**

**聞き手:** 具体的にはどのような活動でしょうか？

八尋: 現場改善のベースと考えているのが、「現場改善レベルピラミッド」です。  
これは、自分たちの活動を自己評価でランクB・A・Sとプロットし、ランクアップを目指すものです。

**聞き手:** 全体を“見える化”させたわけですね。

八尋: スタート当初は、B ランクのチームがほとんどでしたが、改善プロセスを見える化すると、「他より進んでいる、いない」と競争意識が芽生えたり、自分達に足りないプロセスは何かを理解できたりして、ランクアップが加速しました。

Sランクの入り口に入るチームが出てくると、CS(顧客満足)、ES(従業員満足)を中心に自分たちのレベルを上げていくという目標を持ったチームも出てきました。

**聞き手:** CS はまだしも、ES まで考えるチームが出てきたのですか！

八尋: はい。そうです。これは、上から「こうしなさい」と言われても絶対に進まないですね(笑)自分たちでCSとESを上げる、というベクトルを合わせて、楽しみながら目標に向かっていった気がします。

八尋: また、「ミツバチ作戦」というプロジェクト毎の個別相談会も実施しました。

**聞き手:** なかなか、ユニークな親しみやすいネーミングですね。

八尋: ありがとうございます。これは、生産革新推進グループが各プロジェクトの悩み事に対し、生産革新のコンセプトを伝えたり、他のチームの解決策を提示するのです。そうやって全体のレベルを上げていくことを目指しました。

**聞き手:** 身近に目標となるチームがいることで、モチベーションも上がっていくのかもしれないですね。

八尋: 社内では100ものチームが常時動いていますが、全チームのカルテを作っています。活動や状態を細かく見ることで、どのような「見える化」をし、問題発見ができているかなどが細かくわかります。

そして、社長が全プロジェクトを回るしくみになっています。これも同様に掲示板等により「見える化」しています。

**聞き手:** 社長が全プロジェクトを回るのですか！それはすごいですね。

八尋: いろいろなレベルのチームが出る中で、現場改善意見交換会としてトップが巡回しながらレベルの整合性をとったのです。これは基本的に“褒める会”です(笑)

結果として、褒めることでボトムアップ型の雰囲気醸成できた気がしています。

**聞き手:** 社長の「現場力向上」の意識がプロジェクトの士気を高揚させているのですね。

## ソフトウェア開発は人次第！

聞き手:ズバリお聞きします。高品質なソフトウェアを開発することに最も重要なものは何でしょうか？

八尋:はい。間違いなく“人”です。そして、チームワークとコミュニケーションです。しかし、それを引っ張る人間がいないとダメです。

聞き手:引っ張る人間とは、リーダーということでしょうか？

八尋:もちろん、プロジェクトを牽引するリーダーが重要であることは言うまでもありません。それにプラスして、サポートをするスタッフが必要なのです。現場のメンバーは Q(Quality)、C(Cost)、D(Delivery)確保のため、日々必死なわけですから。

聞き手:なるほど。

八尋:また、チームづくりができて初めてよい仕事ができ、よい結果が出ます。コミュニケーションが悪いチームはどこかで必ずトラブルが起きます。

聞き手:これらのサポートの陣頭指揮を執っているのが八尋本部長であり、サポートスタッフが技術戦略本部の方々なのですね！

## JCSQE 資格への期待

聞き手:最後に、JCSQE 資格への今後の期待がありましたらお聞かせいただけますでしょうか？

八尋:JCSQE 資格はこれからますます大きな意味を持つてくると思います。「当社は高品質なソフトウェアを作り込める人材が多くなります！」という外部へのアピールだけではなく、メンバーのモチベーション維持にも意義がありますし、何よりも品質という名の共通言語の醸成ができています。

そういった意味では、ますます充実し、発展をしていってほしいと思います。

聞き手:ありがとうございます。今後も JCSQE 資格は、“すべてのソフトウェア技術者に品質技術を！”をキーワード、真に企業に役立つものを作るために邁進して参ります。引き続き、ご活用ください。そして、今後の JCSQE 資格にますますご期待ください。

聞き手:本日は、ありがとうございました。